23年度および24年度が30% 未満であった。

3．歯科補綴系，口腔外科系と比較して66.8％が歯科保存系治療を症例報告に用いていた。歯科保存系の治療内容を分野別でみると，歯内系治療が若干少ないものの，ほぼ均等であった。

4．指導歯科医・協力歯科医は半数近くが保存系分野であった。

【考　察】1．多くの年度において当院での研修期間が長いＡプログラムが多く選択される傾向にあったが，平成24年度ではＢおよびＣプログラムの院外での研修を選択する研修医が多く認められ，平成23年度および平成24年度では研修修了後に本学に在籍した者も少ない傾向にあった。これらは東日本大震災後の影響が関与しているものと考えられた。

2．症例報告からコンポジットレジン充塡，スケーリング，感染根管治療などの歯科保存系の治療が研修医の高頻度治療であることが推察され，それにともなって指導に関わった歯科医師も歯科保存系の者が多い傾向にあったと考えられた。

【結　論】1．奥羽大学歯学部附属病院おいて10年間で412名の臨床研修歯科医師が研修プログラムを修了した。

2．Ａプログラムの選択が多い傾向にあったが，平成24年度ではＢ，Ｃプログラムが多く選択された。

3．症例報告では歯科保存系治療が多く，指導した歯科医師も歯科保存系分野の者が多い傾向にあった。

10）自傷行為防止のためにマウスガードを応用したLesch-Nyhan症候群の一例

○関野　貴大，高橋　俊智，三科祐美子
安積　優衣，畠山有紀子，赤城　千佳
永山　道代，加川千鶴世，島村　和宏
（奥羽大・歯・成長発育歯）

【緒　言】Lesch-Nyhan 症候群は核酸代謝酵素の遺伝子変性による伴性劣性遺伝である。全身所見として不随意運動，精神発達遅滞，高尿酸血症がみられ，歯科的所見では口腔粘膜の咬傷が多い。今回，Lesch-Nyhan 症候群患児に対し歯科的管理を行う機会を得たのでその概要を報告する。尚，今回の発表に際し，保護者の同意を得ている。

【症　例】初診時年齢１歳９カ月の男児。下口唇裂傷の精査，加療を主訴に当科を紹介，受診した。

既往歴：クレチン病，肛門周囲膿瘍，高尿酸血症，精神運動発達遅滞

家族歴：特記事項なし

現病歴：生後11カ月頃より下口唇赤唇部に口傷による実質欠損と潰瘍が認められ，近医を受診した。下唇を外反しテープ固定で経過を診ていたが，下口唇辺縁の欠損が著しいため，他の対応策を希望し当科初診となった。初診時には，上下顎両側第１乳臼歯まで萌出しており，上顎右側乳中切歯と乳側切歯は癒合歯と思われた。上唇小帯の高位付着と下口唇一部欠損および潰瘍も認められた。

【治療経過】初診後体調不良のため未来院となり，２歳４か月時から，下口唇の咬傷悪化を防ぐため上顎にマウスガードを装着した。マウスガード作成にあたっては，できるだけ咬合に変化を与えないように心掛けた。５歳頃から拒否行動が強くなり，印象採得に苦慮するようになったため，口腔内の精査と初期治療，ならびに印象採得を目的に全身麻酔下での処置を選択し，修復処置と印象採得を行い，マウスガードを作製装着した。

【まとめ】２歳４カ月時から，マウスガードを装着することにより，歯の咬耗や破折を防ぎ，咬傷による軟組織へのダメージを軽減することができた。今後，永久歯への交換に伴い口腔内の違和感から，咬傷が頻発する可能性もあるため，定期的な観察を続けながら，予防に努めていきたいと考えている。

11）Fusuma sliding flap法を用いた下唇癌切除後の下唇再建の1例

○松葉　雅俊[1]，河西　敬子[1]，矢代　晋一[1]
秋本　哲男[1]，小板橋　勉[1]，三科　正見[1]
金　　秀樹[2]
（寿泉堂綜合病院・歯科口腔外科[1]，
奥羽大・歯・口腔外科[2]）

【緒　言】下唇癌の手術では下唇の全幅・全層が失われ，顔貌の整容性と口腔機能が著しく損なわれることが多い。今回われわれは，下唇癌切除術